

## 特別配架(音楽をモチーフとした本 他)

4月10日(土)貸し出し開始

池袋ウェストゲートパーク	石田衣良	2003年「4TEEN」で第129回直木賞を受賞した石田衣良。本作は若者を中心に人気の高い連作ミステリーシリーズ。池袋西口公園近くの果物屋の息子「マコト」が依頼された難事件を次々と解決し、住民の幸福と秩序の維持をめざす物語。 作中には、バッハからストラヴィンスキーまでのクラシックやメシアン、ライヒなどの現代音楽が登場し効果をあげている。
池袋ウェストゲートパークⅡ 少年計数機	石田衣良	【Ⅰ】 池袋西口公園(おれたちはカッコつけるときはいつも「ウエストゲートパーク」と呼んでいた)の本当の顔は週末の真夜中。噴水のまわりの円形広場はナンパコロシウムになる。ベンチに女たちが座り、男たちはぐるぐると円を描きながら順番に声をかけていく――。 【Ⅱ】 さらに鋭く、マコトとGボーイズが、池袋の灰色ゾーンを駆ける。時代の「エッジ」を生きる少年達を活写する、新世代ストリートミステリー。「池袋ウェストゲートパーク」第2弾。 【Ⅲ】 若者を熱狂させる音楽に混入する不気味な音の正体は……。最凶のドラッグ、偽地域通貨、連続ホームレス襲撃。壊れゆくストリートを抜群の切れで駆け抜ける「池袋ウェストゲートパーク」シリーズ第3弾。
池袋ウェストゲートパークⅢ 骨音	石田衣良	
あの川のほとりで(上)(下)	ジョン・アーヴィング	「ガープの世界」、「ホテル・ニューハンプシャー」でおなじみ、現代アメリカ文学を代表する小説家。日本にも江國香織や西加奈子など彼を好きな作家にあげる人は多い。 本作は、ニューハンプシャーの山あいの小さな林業の町に暮らす料理人とその息子が熊と間違えて人を殺し、逃避行する物語で、半自伝的な長篇である。 なぜ今回の企画リストに入ったのか。それは物語の出だしに、ボブディランの名曲「ブルーにこんがらがって」の歌詞が登場するからにほかならないのです(汗)。(館長)
ハイ・フィデリティ	ニック・ホーンビィ	イギリスの小説家、エッセイスト。スポーツ(サッカー)、音楽に関する著作で知られる。本作は、1995年に出版された小説で、中古レコード店を営む音楽オタクの独身男ロブと、出世街道まっしぐらの女性弁護士ローラが悪戦苦闘を繰り広げるラヴ・ストーリー。英国だけで百万部を突破したベストセラー。2000年には米国で映画化されている。
阿久悠と松本隆	中川右介	著者は、「クラシックジャーナル」や音楽家・文学者の評伝などを編集・発行。作家としてクラシック音楽、ポップス、歌舞伎等の評伝に定評がある。本作は、「また逢う日まで」「UFO」「勝手にしやがれ」、「ルビーの指環」「赤いスイートピー」…日本の大衆がもっともゆたかだった昭和後期。「うた」で時代を完全に支配した不世出の作詞家2人を主人公に、あの時代の残響と1億人の集合無意識を描ききる力作評伝。
演歌の達人 高音の哀しみ	佐藤稟一	著者は竹中労を敬愛する演歌ファン。 本書は、美空ひばり映画の不当な評価に怒り、都はるみの舞台に滂沱の涙を流し、森進一を現代のカストラートと呼ぶ超個人的、挑発的、偏愛演歌論である。
ページをめくるとジャズが聞こえる 村井康司《ジャズと文学》の評論集	村井康司	「ジャズと文学」というサブタイトルのとおり、まさに今回の企画にピッタリの本が本年4月に出版されました!(朝日新聞書評にも掲載)ジャズ評論第2世代ともいえる1958年生まれの著者が、村上春樹、フィッツジェラルド、ボリス・ヴィアン、ジャック・ケルアックなど、文学の中のジャズを徹底的に掘り下げて、実際の音とともに熱く語る2020年4月発刊の最新評論集。本に登場する462曲のプレイリストも圧巻!
BLUE GIANT6~10	石塚真一	ジャズに心打たれた高校3年生宮本大が、「世界一のジャズプレーヤーになる…!!」という無謀とも言える目標に、真摯に正面から向かい合う物語。舞台は仙台、広瀬川から始まる。山岳漫画「岳」でも知られる石塚真一によるジャズを題材とした漫画で、『ビッグコミック』にて2013年号から2016年まで連載された。第20回文化庁メディア芸術祭漫画部門大賞受賞。